

いま中国に起こっている政権抗争！

華国鋒の戦い

なかじまみね お
中嶋嶺雄
(東京外語大助教授・中国問題)

彗星のごとく現われ、突如ナンバー1の地位を獲得した華国鋒主席。毛沢東の死後一か月で文革派・上海グループの四人を打ち倒し、権力を手中にしたこの新指導者の出生・党歴は、そして毛以上と囁かれる底力のほどは——現代中国研究の第一人者が、緊急解説する。



1 現実となった北京政変

毛沢東死して中国はやはり「山雨来ラント欲シテ風楼ニ満ツ」だったのであり、文革派上海グループにとって「帝王」の死は、まさに「無可奈何花ノ落チ去ルヲ」だったのである。

それにしても事態のテンポはあまりにも早かった。去る四月の天安門事件に際して「『反動的文人』(『人民日報』)がうたったように、状況はまさに「マルクス・レーニン主義を骨抜きにする秀才どもよ、引きさがれ」(「談那些關割馬列主義的秀才們 見鬼去罷」)だったのであり、「熱血はほとぼしって長江

(「江青」)の流れを染めん(熱血一腔染江流)」だったのである。しかも、毛沢東葬送の喪も明けぬ去る十月七日、その霊前で弔辞を読み、団結を誓ったその男が「喪主」もろともに亡き「帝王」の側近を一網打尽にしてしまった。なんとという背徳、なんとというおぞましき、だが、そうしなければ、華国鋒らが逆にやられていたかもしれない。皮肉にも、文革派の予言どおり、中国における「階級闘争」はまさに「喰うか喰われるかの闘争」な

のであった。

私は本誌先月号の拙稿「毛沢東の死——混乱と再統一の図式」において、「文革派は、毛沢東側近として強権的な家父長体制を形成し、それを担ってきた集団であり、それだけに、毛沢東亡き今日、その前途には大きな不安が横たわっている」と書いたばかりである。

同時に、「いずれにせよ、長期的には『非毛沢東化』の政治過程は不可避であり、文革派の将来に希望は少ないように思われる」とも書いた。だが、こうも事態の展開が急速かつ劇的であることまでを予測し得るはずがあらうか。

それにしても、文革派上海グループは、なぜこのように脆かったのであろうか。全般的には、わが国の中国論議の幻想性にさいなまれながらも、私がこれまでしばしば強調してきたように、いわゆる文革派の政治的・社会的基盤はきわめて皮相なものであり、中国の民心をとらえていなかったということになる。ひいては、毛沢東政治そのものには、いし、当の中国においては、潜在的な批判の潮流がその水脈を増幅させつつあったのであ

る。

このような方向性は、私の見方によれば、たんに文化大革命の過去十年間のみならず、一九五〇年代後半の毛沢東政治の急激な旋回以来(「百花斉放・百家争鳴」運動から反右派闘争、そして「大躍進」政策へという急旋回であり、このとき以来、毛沢東は恣意的な不断革命論・永続革命論と「社会主義社会での階級闘争論」を観念的に絶対化し、そのような虚像において「毛沢東思想」と自己の政治権力を絶対化してきたのであった)、「毛沢東思想」の黒い影がますます拡大するのと反比例して明白になってきていたといえる。

従って、今回の事態は、たんに文化大革命の否定につながるばかりか、五〇年代後半以降の毛沢東政治の否定にまで進みかねない内在的ダイナミズムをはらんでいるような気がする。それは、多くの新聞論調がいうように、「毛沢東思想」は依然として正しく、陳伯達や林彪同様に、江青、王洪文、張春橋、姚文元ら「文革派」が誤ったのだとか、彼らが毛沢東路線を逸脱したのだとかいうことではすまされないのであろう。その方向は「反

文化大革命」であり、非毛沢東化であるように思われてならない。

2 カギを握った汪東興

このような前提のもとで、次に、いかに政治の表層にあったとはいえ、過般の天安門事件では、首都工人民兵を動員して、数十万の「造反者」を一挙に制圧したほどの文革派が、このように脆くも崩れ去ったのはなぜかという問題を検討してみよう。この問題は、たんに、今回の血なまぐさい出来事为核心に迫る問題であるばかりか、ひいては、「華国鋒の戦い」の断面をくっきりと照らし出すことになると思われるからである。

今回の事態は、江青らのクーデター計画にたいする処断だと伝えられているが、私にはむしろ、林彪事件同様の一種の「予防クーデター」だと思われる。いまのところ、江青夫人らは、北京市内で党中央の会議の席上捕えられたとの情報と、北京郊外約三十キロの保養地で会合中に一網打尽にされたとの情報が交錯しているが、しかしながら、彼らとて、今日の中国の権力中枢における拮抗状態がいかに酷烈なものであるかぐらいの状況判断は

十分にあつたであらうし、ましてや、江青夫人、王洪文・党副主席は、彼らのいわば「手兵」としての首都工人民兵を擁しているはずであり、張春橋も人民解放軍総政治部主任という軍の要職にあつたはずである。ところが、彼らは、こうもたやすく潰え去つたのであつた。

今回の事態を見ると、このような出来事が現実となるまでに、中国全土に人民解放軍が動いた様子は見えないし、北京に向けて、周辺の軍が移動した形跡もない。つまり、北京市内ないしはその近郊において、密かに、しかも一挙に事は成就したのである。そこで問題は、北京の軍事上公安上の管制状況であるが、北京には、これまで毛沢東をはじめ中南海の「毛王朝」を警護してきた部隊として北京衛戍区八三四一部隊という毛沢東親衛隊があり、この部隊は特務の重鎮で延安以来の毛沢東警護の責任者、汪東興・政治局委員（党中央弁公庁主任）に率いられていたのである。

「毛沢東追悼シリーズ」になつて『北京週報』の最新号（一九七六年第四十一号）は、「毛主席よ、われわれはあなたの革命

路線のために永遠に警護に立つ」と題する八三四一部隊の「誓い」を『人民日報』から転載したばかりである。一方、中国の要人には、さらに、いわゆるポディー・ガードとして中央警衛処が統率する警護が必ずついでおり、外国要人の警護に関しても、この中央警衛処が、相手国の警護関係者と折衝することになつてゐる。この中央警衛処の責任者も汪東興であり、汪東興はこうして、北京中枢の「近衛兵」と要人警護の系統との双方を一手に統轄している人物であることを決して無視することはできない。ところで、これらの警護者はたしかに要人の安全をはかる衛者ではあるが、同時に、これら要人を看視する特務の役割を担つてゐることを忘れてはなるまい。

この点では、文化大革命の初期であつた一九六六年、当時なお国家主席であつた劉少奇の中東訪問に汪東興自身が同行していることが想い出されるが、彼は実は、当時の状況において劉少奇の動向を監視するために毛沢東からじじじきに派遣されたのであつた。この経緯がその一端を十分に物語るように、今回の北京政変においても、重要なカギを握る人

物こそ、華国鋒であると同時に汪東興であると思われる。私は、今回の衝撃的なニュースに接したとき、これまで毛沢東側近として「毛王朝」を守りつづけてきた汪東興が、先の「毛主席よ、われわれはあなたの革命路線のために永遠に警護に立つ」といった「誓い」の言葉にもかかわらず、「毛王朝」に叛いたのではないかと一瞬思ったが、やはり、汪東興は、上海グループに叛き、華国鋒側に「寝返つた」模様である。どうも汪東興は逮捕されていないどころか、今回の事態に際して決定的に重要な役割を演じたように思われる。

一方、首都工人民兵の直接の責任者で北京市总工会主任、北京市革命委員会副主任の倪志福・党中央政治局委員候補はすでに逮捕されているようであることも、私のこの推測を裏付けるであろう。もしも、私の推測がはずれず、汪東興も文革派として逮捕されるとすれば、それは、北京衛戍区八三四一部隊の上級機関である北京軍区の正規軍が陳錫聯司令のもとで一挙に文革派の「私兵」と「親衛隊」および警護者を制圧したことになるが、それほど大規模な軍事的摩擦を伴わずに事態は成就したのではなからうか。

ところで、その汪東興という影の主役についてであるが、推定年齢六三歳、江西省出身のこの党幹部の経歴は、その前半がほとんど不明である。しかし、延安時代からの一貫した毛沢東の警備責任者としてつねに毛沢東に寄りそつてきた人物であり、この点で、失脚した陳伯達（文革小組々長で党中央政治局常務委員であつた）が毛沢東の政治秘書つまりブレインであつたのにたいし、汪東興は毛沢東の特務兼ポディー・ガードであつたのである。彼は、中国革命の最終段階では毛沢東の延安退出から北京入場に至るまで、その安全を図り、建国直後に毛沢東が中ソ友好同盟交渉のため初めてモスクワを訪れ、スターリンと会見したときにも、陳伯達とともに毛沢東に同行している。一九五五年末以来、党中央公安部副部長であり、こうして特務公安関係を一貫して歩いてきた彼は、文革後の九大大会で中央政治局委員候補に一挙に昇進したものであつた。このような経歴が示すように、汪東興はつねに影の人物として毛沢東政治の中枢もしくは中南海の「大奥」に存在してきたのであつたが、その経歴が示すよ

うに、江青夫人のように途中から延安入りして成り上がった人物ではなく、ましてや張春橋、姚文元、王洪文のように江青夫人がつくりあげた上海の文芸サロンにつらなるイデオログではなかつた。この点で、陳伯達、林彪同様に、彼は非上海グループの文革派なのであり、江青グループとはいずれ決裂するか、さもなければ陳伯達、林彪同様の末路を上海グループによつてたどられる宿命にあつたといえよう。このような汪東興が、毛沢東死後の「喰うか喰われるか」の激烈な権力闘争のなかで、同じ、文革派とはいへ上海グループではなかつた華国鋒の立場に賭け、毛沢東なきあと、その行末に大きな不安のある文革派を見限つたともいへなくはない。いづれにせよ、今日の中国の政治ドラマは、このような雰囲気の中で現実化したのであつた。「政権は銃口から生まれる」とは、まさに毛沢東の至言であつた。

3 華国鋒の奪権

私は今日の中国において、そもそも集団指導制は問題になり得ないことを説いてきたが、華国鋒は、江青夫人らの一挙失墜という

衝撃的な事態を代償として、ついに党主席という絶対的な地位にいたのである。当面、國務院総理の地位も兼務するとすれば、それは権力体系のうえでは、党主席兼首相という、毛沢東も周恩来も任じ得なかった地位を得たことになる。

毛沢東に比して決定的に不足しているカリスマ性をこのような強権の制度的保障によって当面は補填するのである。状況が安定すれば、あるいは國務院総理のポストを、たとえば李先念副総理にゆだねるのかもしれないが、ここ当分は党・軍・政の三権を一手に担うのではなからうか。

このような華国鋒とは、ではいったいどんな人物なのであろうか。今日の時点で華国鋒に関する経歴を知る手がかりはきわめて少ない。その少ない手がかりをたよりに、できるかぎりの資料によって一応のスケッチを試みるならば、ほぼ次のようにならう。

まずその出生についてであるが、生年は一九一〇年、九年、一一年などと諸説があり、従って年齢も当年六十五歳前後というだけで定かではない。まだ五十九歳だという説もある。出生地も、山西省、湖南省、江西省など

諸説があつて、彼自身、外国賓客に山西省出身だと語ったとの情報や彼の言葉が山西訛りだとの判断から、山西省説が一般的なようである。しかし、この点も確実な根拠に乏しいのが現状であり、むしろ専門家的判断からすれば、湖南省説の方が妥当であるように思われる。

中国共産党への入党は一九三七年夏、つまり蘆溝橋事件直後であり、延安の抗日軍政大学に学んだとの情報もあるが、要するに解放前の彼の経歴は最大限この程度しかわかっていないのである。ただ、延安からまもなく山西省太行山区へ入り、そこで抗日戦争に活躍したらしいことはほぼ確認することができ。第二次大戦後はひきつづき山西省で工作に従事し、四九年の中華人民共和国成立以後は党中央直轄の地方ビューローであった党中央中南局の組織部および統一戦線工作部の中堅幹部となり、一九五二年には湖南省に移った。五五年、はやくも毛沢東の故郷である湖南省湘潭県(地区)の党委員会書記となつてい。以後、湖南省党委員会の統一戦線工作部長や湖南省副省長を務めるなど、およそ二十年間にわたり湖南省の中堅幹部として活躍し

たのであつた。彼の名前が中央にも少しく知られるようになったのは、やはり文化大革命の時期であり、彼は、毛沢東が打倒を目指した実権派の頭目、劉少奇の故郷が同じく湖南省であるだけに、両派が競つた湖南省で実権派打倒に大きな力を注ぎ、また毛沢東の故郷の旧居保存などにも大いに尽力したといわれている。

一方、湖南省は、六七年秋から六八年初頭にかけての文革の激動期に、やがて極左分子として批判され、打倒された「省無聯」(湖南省会無産階級革命派大連合委員会)が「徹底造反」を叫んで立ち上がったところであるが、おそらく華国鋒は「省無聯」の打倒(六八年一月二十六日の長沙における十万人集会は「省無聯」打倒の集会でもあつた)にも大いに貢献し、こうして極左派鎮圧にも一役買ったものと推定される。そのような華国鋒は、六八年四月、全国で最初の省レベルの革命委員会が湖南省に成立したとき、その第二副主任であつた。すでにその前年六七年一月に湖南省革命委準備小組が成立したときはその組員、同年九月には同小組副組長だったのである。やがて六九年四月の九大大会で中央委

ポスト毛の完全記録

週刊サンケイ 北京クーデター!
緊急増刊

価 250 円
発売中

華国鋒と江青

★ドキュメント・惨殺!? その日の政治局会議

★華国鋒主席の徹底大研究／中嶋嶺雄、柴田穂

★人民解放軍の全貌／相関図、人脈、戦力のすべて

★不死身の「後継者」鄧小平の戦い／桑原寿二

★香港コンフィデンシャル／林サンケイ特派員

★江青夫人の栄光と没落／鳥居民

本邦初訳／華国鋒処女論文と毛沢東弔辞ほか

★特別報告・CIAの中国謀略／角間隆

●サンケイ出版

員、七〇年十二月の湖南省党委員会再建とともに第一書記兼革命委员会主任として名実ともに湖南省の最高指導者に昇格していった。

やがて一九七一年九月、林彪異変が起つたが、華国鋒は上海の王洪文、河南の紀登奎とともに北京へ招かれて林彪異変の処理と調査工作に当つた。こうして、華国鋒は初めて北京の槍舞台で党中央の重要工作に従事することとなったのであり、七三年夏の十大大会ではついに中央政治局委員に列せられたのであつた。次いで昨年一月の第四期全国人民代表大会では國務院副総理兼公安部長になった。昨秋の「農業は大案に学ぶ全国農業会議」では「右」の鄧小平、「左」の江青がそれぞれ重要報告をおこなつて対立したとき、彼がバランサーの立場から総括報告をおこなつて初めて華国鋒の独自の政治力が内外に注目されたのだといえよう。

周恩来死後、「走資派」批判のキャンペーンの開幕と同時に総理代行となつて一躍脚光を浴び、四月の天安門事件直後に党第一副主席兼総理になったことは、すでに周知のとおりである。

以上のような経歴に加えて、最近注目され

ていることは、彼がその風貌とともに毛沢東の姻戚関係にあるのではないかとの推測である。こうした推測としては、毛沢東の最初の妻・李宝珊の親戚だという中国内部での噂から、毛沢東の二度目の妻・楊開慧とのあいだに生まれた三男・毛岸竜だとの説(台湾の『聯合報』七十六年十月四日)まで多々あるが、これらの推測を一概に否定しきれないところに華国鋒をめぐる謎が残されているといえよう。

しかし、以上のように、判明したかぎりの経歴を検討してみると、華国鋒にかんして次の諸点がほぼ明らかになるような気がする。まず第一には、その出生地はともかく、華国鋒は中国革命の聖地とも思われる毛沢東の故郷・湖南省湘潭県で活躍し、一貫して湖南省のリーダーであったことである。このことが大きな意味をもつことはいうまでもない。第二には、その湖南省の文化大革命で活躍し、彼の政治的資産を大きくしたことである。そして第三には、林彪異変の処理という党中央の重要な秘匿事項に関与したということであろう。第四には、たんに党書記であったばかりか党の組織部、統一戦線工作部といった明

「喰うか喰われるかの闘争」を繰り返し、そのような「階級闘争」を「十回でも、二十回でも、三十回でも」永遠に続けるのだといってきた中国において、華国鋒体制が安泰だとは決して断定できない。

スターリン死後のソ連に例をとってスターリン晩年、同じく「社会主義社会での階級闘争激化論」というスターリンのテーゼを用いてスターリン粛清に力があったベリアを、これまで相次ぐ失墜者をつくってきた文革派にたとえるなら(文化大革命以来をとっても、劉少奇、彭真、陸定一、周揚、陶铸、王力、戚本禹、関鋒、陳伯達、林彪、黄永勝、李作鵬、邱会作など、党中央に連なつたリーダーたちだけでも、あまりにも多くのリーダーたちが消えていった。もとより、彼らの生死も定かではないのである)、華国鋒はあるいはマレンコフなのかもしれない。あるいは、スターリンが自己の同郷のグルジヤ人で秘密警察(内務人民委員会)の首領であつたベリアが晩年重用したように、毛沢東と同郷もしくは同郷で工作してきて一貫して特務・公安関係の任にあつた華国鋒公安部長を毛沢東が引き寄せたとするならば華国鋒はベリアに相当す

らかに特務関係につながる部門を歩いてきたことであり、この点は彼が昨年一月以来、公安部長に就任するに際して大いに重要な意味をもっていたであろう。

この点において華国鋒は中国の特務の重鎮、汪東興と結ばれるのであり、この辺に今回の事象の核心が隠されているのかもしれない。華国鋒について、その農村工作の経験を指摘するむきもあるようであるが、湖南省を工作の舞台にしてきたことがそのまま農村工作には結びつくとは思われず、また昨年「大寨農業会議」での報告がそのことの証明だとも思われない。やはり華国鋒の体質は、その特務・公安的な側面にあるといえよう。この辺の事情こそ、彼が今回のような措置を敢行し得たカギではなからうか。そして、第五にもしも彼が毛沢東とならかの「血のつながり」があるとすれば、彼こそは毛沢東継承権を第一に主張し得る正系だということになるであろうし、この点が事実なら、江青夫人などは、「毛王朝」にとつて所詮、延安以後の新参者にすぎないのかもしれない。

少なくとも華国鋒は、陳伯達、林彪をして先の汪東興同様、文革派ではあつても非上海ののかもしれないのである。ただ、今日の中国の状況はスターリン死後のソ連よりも、さらに酷烈であり、波乱含みだといえるのである。

このように見てくると華国鋒体制は、歴史の前例からしても安泰だとはいえないが、しかし私には、当面、華国鋒指導部がその体制を強化し得るような気がする。それは、中国社会にとつて、また中国民衆にとつて、最大の「主要矛盾」であつた文革派上海グループを一挙に打倒したことは、彼らにたいする積年の怨念や憎悪が深く深く中国社会内部に沈澱していただけに華国鋒の今回の処断がいかに神を穢し、徳に悖るものであらうとも、民衆の支持を得るであらうからである。もとより、政治力学的には、華国鋒指導部が軍と特務・公安関係の支持を得ているかどうかにかかっている。前者については、軍と党の長老や「黄安グループ」の実力派軍人たちは、むしろ鄧小平や亡き周恩來に近いとはいえず、華国鋒指導部と完全に一体ではあり得ないが、しかし、当面は、この間の矛盾は「副次的矛盾」であり、後者については、汪東興とともに彼自身がその方面での強い力を有している

グループであり、もしかすると、やはり陳伯達、林彪、汪東興同様、江青夫人より以前の「毛王朝」の臣下であつたのかもしれない。

そのような華国鋒は、今回、一気に上海グループを打倒したのであつた。そして軍の首脳は、李先念らの実務派官僚層とともに、久しく以前から上海グループとは対立していたのであり、とくに林彪事件以降、そのことははっきりとしていた。

なかでも、李先念と同郷の湖北省黄安県出身の実力派三軍人、陳錫聯・北京軍区司令、許世友・広州軍区司令、李德生・瀋陽軍区司令らの「黄安グループ」は、上海グループとの対抗上も華国鋒を支持したのであつた。こうした状況のなかで、先に述べたように汪東興らが文革派のために動かず、決定的な段階で「寝返つた」とすれば、上海グループにはもはや出口はなかつたのである。

4 華国鋒体制の行方

このように驚くべき強硬な手段によって奪権に成功した華国鋒体制の将来をいま占うことはかなり困難である。なぜなら、まさに

といえよう。そして、中国のような社会体制のもとでは、ひとたび奪権が成ると、新たな権力者に向つて、一種の「雪崩現象」が起こることを決して無視することはできない。はやくも、文革派の拠点、上海の各单位や清華大学、北京大学、大衆生産大隊、大慶油田などで、いちはやく新しい権力者に迎合すべき「雪崩現象」が起こっているようであるが、もはや毛沢東亡く、文革派首領が一網打尽にされたとなれば、毛沢東政治への大衆の批判の潜在という重要な要素をそこに加えるまでもなく、状況は急テンポに進展するであらう。

そこで重要な意味をもつのが、鄧小平の影

新しい住まいの設計・臨時増刊
'76年版 秋冬号
最新の住宅融資
公的、民間住宅融資のオールガイド
AB判★680円
サンケイ出版

ではなからうか。周知のように鄧小平は天安門事件によって、党中央から再び失墜していたが、当時、「反党・反革命分子」と断定されたながら、その党籍は残されたのであった。

私が本誌で以前に述べたようにこのような異例な措置は、「毛沢東以後への時代の一つの捨て石」(拙稿「亀裂深まる毛沢東体制——天安門事件と鄧小平失脚「正論」一九七六年六月号)であったように思われてならない。それゆえに、鄧小平は毛沢東以後の来るべき日を期して、「最後まで悔い改めなかった」のであろう。このように考えるならば、当面は、「批鄧」を依然としてかかげるであろうが、今回の事態の背景にはすでに鄧小平が存在していたと見るべきではなからうか。そして鄧小平再失脚の経緯そのものが上海グループの陰謀だとして清算されるかもしれないのである。

一部の報道として、今回の事態のうちに、鄧小平が失脚後潜んでいた広州から許世友司令とともに北京に向ったとの報道もあったが、私のところには、鄧小平は天安門事件以後も一貫して北京に存在していたとの、きわめて信頼すべき筋からの情報も入っている。すなわち、かつて文化大革命の時期に三角帽子をかぶらせられて紅衛兵にひきまわされて失脚し、鄧小平復権後再出現したが、この間の「走資派」批判に関連して消えていった万里・鉄道部長が今回の出来事のものちに再復活しているとの報道もある。北京で鄧小平を主人公にしたと思われる映画がテレビで放映されたとはいふニュースとともに一つの重要なインディケーションではなからうか。

いずれにせよ、文化大革命の中心的な担い手が前回の陳伯達、林彪ら、今回の上海グループとすべての潰え去ってなお文化大革命の勝利を語り得るであろうか。中国社会のなかには、文化大革命そのものためにする批判と反撥がきわめて根強かっただけに、華国鋒指導部はこのような潮流を無視し得ず、むしろ「反文化大革命」を大きくすすめるのではなからうか。去る十月一日(国慶節)の『人民日報』社説「毛沢東思想を学習し毛主席の遺志を受け継ごう」が、「一連の革命運動、とりわけプロレタリア文化大革命をおしすすめ、劉少奇、林彪、鄧小平によるプロレタリア階級独裁転覆、資本主義復活の陰謀を粉碎し……」と述べていたのにたいし、事態の処断があつたのちに華国鋒新指導部が出した『人民日報』『紅旗』『解放軍報』の三紙誌共同社説は「プロレタリア文化大革命の勝利の成果を強化発展させ」と述べただけで文革路線の推進にはもはや言及しておらず、しかも「批鄧」にのみ言及して劉少奇、林彪とこれまで必ず出てきた「反党・反革命分子」の名前が一切消えてしまっているのである。このことは、文革路線の清算のみならず、劉少奇、林彪らがいずれも文化大革命の犠牲者として名誉回復する可能性さえあることを示唆しているように思われる。

こうしてすでに「反文化大革命」はすなわち、今後は非毛沢東化からさらに「毛沢東批判」へとすすみゆくのではなからうか。私は毛沢東の死に際し、「後継リーダーたちは、ここまでが毛沢東時代だという一区切りをいま一挙に画そうとしているのかもしれない」(拙稿「毛沢東体制は解体する」、『朝日ジャーナル』一九七六年九月二十四日号)と述べたばかりであった。

これまでの毛沢東政治があまりにも苛烈で理不尽なものであっただけに、そのリアクションはとめどもなく大きいのではなからうか。(10月19日記)

サンケイ オピニオン マンスリー

正論

昭和五十一年六月八日国鉄首都特別旅客誌第七三二
二号 昭和五十一年十二月一日発行（毎月一日発行）通
巻第三十五号 昭和四十九年五月二日第二種郵便物認可

特集・総理大臣の権力
中国政権争奪！華国鋒の戦い

12

